

アントニオ・グラムシの政治理論とレーニン主義(中)

八木沢二郎

Yagisawa Jiro

済(Ⅱ階級)分析を持ち、「何をなすべきか」の『階級意識論』(Ⅱ
党組織論)を持ち、それを前提とする革命論「二つの戦術」↓「四
月テーゼ」↓「国家と革命」を持っていた。

マルクスの一八四八年段階での永続革命論は止揚されて(第一
インタール・第二インタール↑「資本論」を媒介して)レーニンに復活した。

(注) 革命論を考える時、一七八九年↓一八四八年↓一八七一年↓
一九〇五、一七年と続く「大革命」と資本主義の発展段階―産業資本主義
の成立↓確立↓帝国主義(独占資本主義)への移行↓帝国主義の確立との相
互関連を常に念頭に置く事。

グラムシはロシア革命の影響の下で、「資本論に反対する革命」
とイタリアにおけるソヴィエトにあたるもの、Ⅱ工場評議会運
動から出発して、この二つの急進主義の止揚Ⅱ自己批判―「南
部問題」と「リヨンテーゼ」を経て―として、ヘゲモニーの概
念に到達した。「資本論に反対する革命」の論理構造は、永続革
命論そのものであり、その意味で(アンビバレントな)トロツキ
批判は永続革命論を対象化することによる自己の過去の止揚であ

前号(『情況』〇七年三・四月号)で長々とレーニンとトロツキ
について論じたのは、グラムシの中心思想であるヘゲモニーの概
念を―グラムシは再三表明しているように、それはレーニンの
創出によるものである―理解するには、その事を避けて通れな
いからである。

結論的に言えば、トロツキの複合的発展の法則・永続革命論
は、第二インタールの実証主義、進化論的歴史の発展公式に基づ
く、あるいはスターリン主義の二段階戦略に対して、プロレタリ
アートの主導(指導)性を対置する意味で、解釈ないし一般的予
見としての一面の真理を含んでいたとしても、実践的、具体的方
針としては誤りである。

それに対して、レーニンは「ロシアに於ける資本主義の発展」
↓「農業綱領」(二つの道理論) ↓「帝国主義論」という具体的経

るからである。

グラムシは、永続革命論を素材として（対象化）自己のヘゲモニーの概念を語っているのである。

以上の事を前提として、今号ではグラムシの政治理論を具体的に検討してゆく。

II ヘゲモニー論

グラムシに於けるヘゲモニーの概念は（上）で述べたように、ロシア革命の初期の把握と工場評議会運動の指導の反省の上に立って中間の「南部問題」の段階では、レーニンの労働独裁論——労働者と農民の同盟——にほぼ忠実である。

「トリノ共産主義者は「プロレタリアートのヘゲモニー」の問題、すなわちプロレタリア独裁と労働者国家との社会的基礎の問題を具体的に提起したのである。プロレタリアートは階級同盟の組織をつくりだすことに成功するにつれて指導的かつ支配的階級になる事ができる。この階級同盟の組織によって、プロレタリアートは、勤労人民の大多数を資本主義とブルジョワ国家に反対する行動に立ち上がらせることができる。」（選集二 二八五頁）

「のみならずさらに一歩進んでつぎのように考えねばならない。すなわち、農民と知識人とを指導する事をめざし、これらの社会層の大多数の支援と後続がえられさえすれば、勝利し、社会主義をうちたてる事ができる階級の一員である労働者として。これ

が遂行されなければプロレタリアートは指導階級とはならない。」（選集二 二九三頁）

後期につながる要素として着目しなければならないのは知識人論である。トリノ等の北部の工業都市では——後のグラムシの用語を用いれば、主としてブルジョワ的産業発展を担う「有機的知識人」を生み出し、南部では行政を司る知識人や伝統的知識人を生み出したと分別され、ここに知識人論→ヘゲモニー論の次の展開が予知されているという事ができる。

まず、我々はレーニンのヘゲモニー論とグラムシのヘゲモニー論の関係——グラムシがレーニンから決定的影響を受けつつ、どのようにレーニンの考えを深化、あるいは変化させたのかを——を検討しなければならない。前号でトロツキー「永久革命論との関係でレーニンについて論じた。レーニンのヘゲモニー論は、ロシア革命に於ける経済（下部構造）——「発展」——一九〇七年農業綱領——「帝国主義論」、政治——「二つの戦術」——「四月テーゼ」——「国家と革命」、階級意識論としての「何をなすべきか」の総体からなるそれこそブロックとして理解されなければならないという事が結論であった。即ち①プロレタリアートのヘゲモニーによる労働同盟の客観的根拠であるロシアに於ける資本主義の発展及び階級関係を「発展」と「農業綱領」で分析し、②「二つの戦術」で当面するロシアブルジョワ革命でのプロレタリアートのヘゲモニーを主張し、③そのヘゲモニーを現実のものとする労働者階級の階級意識の形成はどのようにしてなされねばならないかを

「何をなすべきか」で論じ、その中で組合主義的意識と社会民主主義的意識の区別を明確にした上で、社会民主主義的意識は党に

よって「外から」、全面的政治暴露によって注入されねばならないと主張した。従って、レーニンのヘゲモニー論は前提としての下部構造の分析を除くならば、労働同盟におけるプロレタリアートの主導性のみならずそれを保証する階級意識論との結合から成り立っているという事が出来る。（そこにトロツキーとの決定的相違がある）グラムシがレーニンから引き継いだのもそのような意味でのヘゲモニー論である。階級意識の二つの次元「最初の最も基本的なものは経済的——同業組合的段階である。」（選集一 一四六頁）「この段階では、同業組合的利害そのものが、その現在、未来の発展のなかで、同業組合的限界、直接的経済グループの限界をのりこえ、他の従属諸集団の利害となる事ができるし、また必然的にそうなる、という意味を獲得する。この局面で政治性が最も明白にあらわれる。」（選集一 一四七頁）

このようなグラムシの主張は、レーニンの「何をなすべきか」での組合主義的意識と社民的意識に対応している。

「社会民主主義派は労働力販売の有利な条件を獲得するための労働者階級の闘争を指導するだけでなく、また、無産者が金持ちに身売りしなければならぬような社会制度をなくすための彼らの闘争をも指導する。社会民主主義派は、ひとりその当該の企業家集団にたいしてではなしに、現代社会のすべての階級にたいして、組織された政治協力としての国家にたいして、労働者階級を

代表するのである。」（「何をなすべきか」）

「経済闘争は、労働者を政府と労働者階級との関係の問題に「突きあたらせる」だけであって、したがって、どんなにわれわれが「経済闘争そのものに政治性をあたえる」任務に骨をおつても、この任務の枠内では、労働者の政治的意識を（社会民主主義的な政治的意識の段階に）発展させることはけつしてできないであろう。というのは、この枠そのものが狭いからである。」（同上）

「階級的・政治的意識は、外部からしか、つまり経済闘争の外部から、労働者と雇主との関係の圏外からしか、労働者にもたすことができない。この知識を汲みとつてくることのできる唯一の分野は、すべての階級および層と国家および政府との関係の分野、すべての階級の相互関係の分野である。」（同上）

「に対応している。しかし、グラムシの考えはグラムシ自身が再三述べているように、レーニンの継承であることは明確であるが、その差異も又明らかである。」

グラムシ自身によるヘゲモニーの定義は、次の通りである。「支配的な基本集団によって社会生活に押し付けられる指導に対して住民大衆があたえる「自発的」同意、支配集団が生産世界におけるその位置と機能とによって手に入れる威信（従って、信頼）から歴史的に生まれてくる同意」（選集三 八九頁）このように、レーニンにおけるヘゲモニーは、労働者階級の（農民に対する）ヘゲモニーを意味していたが、グラムシのヘゲモニーの概念は、拡張され一般的に支配的階級のヘゲモニーとして論じられる。従って

プロレタリアートのヘゲモニーという面ももちろん論じられるが他方で近代資本主義社会あるいはイタリアでのリソルジメントでのブルジョワジーの支配（ヘゲモニー）の分析のための方法論として用いられる。このようなブルジョワ支配のありかたの考察は後に述べる独特の国家論を生み出すがヘゲモニー論について云えば、それを単に意識、イデオロギーとしてはなくそのイデオロギーを生み出し機能する「ヘゲモニー装置」を指定する所にグラムシの独自性と貢献がある。

「さしあたって、上部諸構造の二つの大きな「次元」を確保することが出来る。一つは『市民社会』と呼ぶことのできるもの、すなわち俗に『民間』のものといわれている諸機構の全体の『次元』であり、他の一つは、『政治社会あるいは国家』の次元である。それは支配的集団が全社会において行使する『ヘゲモニー』の機能と、国家や『法』治に表現される『直接支配』あるいは命令の機能とに対応するものである。」（選集二八八頁）

「すなわち、もつとも重要な国家機能のひとつが、住民大衆を特定の文化・道徳水準にひきあげる機能であるかぎりにおいて、どの国家も倫理的である。その水準（あるいは型）は、生産諸力の発展に照応し、したがって、支配階級の利益に照応する。積極的教育機能としての学校と、抑圧的・消極的教育機能としての裁判所とは、この意味でもつとも重要な国家活動である。しかしほんとうにその目的をめざして流れているものは、いわゆる私的なイニシアティブ、私的な活動であって、これは、支配階級の政治

ンの「科学革命の構造」（みすず書房）と共通している部分が多い。

周知のようにクーンによればパラダイム（世界認識の枠組）がある時代の科学者集団（知識人）に共有化され、やがて、そのパラダイムに矛盾が生じる事によって次のパラダイム（例えば天動説→地動説→相対性理論）チェーンジが生じ又科学者集団による共有の認識となる。この史的唯物論の領域についてはこの論文ではこれ以上触れない。

III 革命とヘゲモニー

以上のようなレーニンとグラムシのヘゲモニー概念の特質をふまえた上で革命論あるいは政治的変革にとつてのヘゲモニーの役割についての両者の見解を検討するのがここでテーマである。というのも、この領域でこそグラムシはレーニンと決定的に異なるという誤った考えがまかり通っており、逆にレーニンとグラムシの連続性、同質性を確認する事が重要だからである。その上に立つてグラムシが問題とした「東方と西方」の問題も論じられねばならない。俗説によれば先に述べたグラムシの「ヘゲモニー装置」論を次のように解釈援用する。市民社会のヘゲモニー装置を拡大し国家権力の「強制」の領域を無力化し市民社会へ吸収——これがグラムシの革命のイメージだと。

そして例えばレーニンに対して次のような批判がなされる。

「レーニンは革命的意識がプロレタリアートの生活経験の自然

的・文化的ヘゲモニー装置を形成している。」（選集四五七頁）

このようなヘゲモニー装置の最大なものには政党であり、組合やマスコミ、宗教等々を指している。近代国家が軍隊や官僚制度を強大化させると共に、市民社会のヘゲモニー装置も又一緒にグラムシによれば一八四八年以降、とりわけ、七〇年以降の帝国主義段階への移行と共に発展し、膨張してゆく。さらにレーニンと区別されるグラムシの独自性の第三の点は、この理論をより普遍的な、そう言うてよければ、史的唯物論の方法論として取り上げ拡大したのである。即ち、上部構造のイデオロギーの重層構造（二重構造）としての「経済的同業組合的」意識と政治的・倫理的意識「ヘゲモニー」である。この意識「イデオロギーの重層構造は、プロレタリアートに於いて現れるだけでなく、「支配階級の思想がその時代の支配的思想」であるとしても、その「支配的思想」についてもこの重層的イデオロギー構造は区別されなければならないのである。この点にグラムシの哲学的貢献がある。

このような、イデオロギーの二重構造は、社会科学だけではなく、自然科学の認識についても、例えば「外界の客観的實在」は、宗教に起源を持つ（神が世界を創造した）「常識」としての外界が客観的な存在であるという考えと、長い自然科学の発展によって検証されてきた（されつつある）それとは区別されなければならない。

（注）選集二「いわゆる外界の實在」

又、グラムシの自然科学上の認識論や知識人論は古典的名著、トマス・ク

発生的所産ではないことを力説した。このことはマルクス主義への彼の重要な理論的寄与とみなされたが、彼は認識を反映とみなし、ブルジョワ秩序を強制的秩序ととらえていたし、彼のヘゲモニー概念は倫理的・文化的意義をもつてはいなかった。そこから、第三インスターにおいても、国家はもつぱら強制機関であり、これに対しては「革命的」暴力が対置されるべきであると考えられていた。」（グラムシと現代」御茶の水書房二二三頁竹内知良）

だが、グラムシは「ヘゲモニーの概念の政治的発展が、政治的実践とは別に、いかに偉大な哲学的進歩をあらわすかということ」を強調しなければならない。（選集一二四九頁）「イリイチ（レーニン）によってなされたヘゲモニーの理論化と実現とは一つの偉大な「形而上学的」事件でもあったと主張できるのである。」（選集一二八一頁）とレーニンの「倫理的・文化的」意義を強調しているのである。また別のところで所謂マルクス主義の三つの源泉にふれ政治学、経済学、哲学の同等性ないし互換性を主張している。これは、レーニンの真髓を「唯物論と経験批判論」に見るのではなく一連の政治的言説に見るべきだという意でもあろう。

従ってグラムシの変革のイメージ、政治、社会、文化革命の位置とその中のヘゲモニーの役割を検討しなければならない。

グラムシは「新君主論」の中で「まず、民族的・大衆的集団意志の形成、次に知的・道徳的改革」（選集一八七頁）と述べ、更に知的道徳的改革と下部構造（経済的改革）の關係にふれ、「経済改革がおこなわれ、社会情勢や経済界に変動がおこったあとで

なければ、文化の改革、つまり被抑圧社会諸階層の文化的向上などということが実現しようか？だから、知的・道徳的改革は、経済改革のプログラムと結びつかずにはられない。というよりも、経済改革のプログラムこそがあらゆる知識・道徳改革の具体的なありかたなのだ。」(選集一八七頁)としている。ここでいう「民族的」大衆の集団意志」とは何を指しているのか、それはどのような国家社会を創るのかという人民の意志に政治意識を意味している。そして言うまでもなく世界観はこのような政治意識をも主要な要素の一つとして含むにしても社会や宗教や自然に対する考え(トーマス・クーン的な意味での自然に対するパラダイム)をも包含する全般的なものである。グラムシは世界観に知的・道徳的改革が「民族的」大衆の集団意志の究極の発展の土台をつくりだす。」(同上)と述べている。このようにグラムシは、まず、民族的・大衆の集団意志の形成即ち政治意識と言っているものであり、かつ知的道徳的改革に世界観の変革は経済的改革なしにあり得ないと主張している。そしてこの経済的改革とは、かつて構造改革論者が主張したような体制内の改良的なものではなく、権力奪取を前提とする社会主義的変革である事は、全体の文脈からも明らかである。だが、一方で民族的・大衆の集団意志の形成は知的道徳的改革なしにはあり得ないと云う。ここでグラムシがいわんとしていることは、被抑圧大衆の文化的向上は政治革命を前提とする経済的向上なしにはありえないとしても知的道徳的改革は政治革命以前に知識人社会を以て中心に一定の大衆によってなされねばならぬ

た見解は権力奪取以前と以後の知的・道徳的改革のありようを事実上ブルジョア革命と同一視するものでありグラムシの見解ではない。ブルジョワ革命に於いては、絶対主義の下で資本主義が発展し、そして、それに応じてブルジョワ的文化思想(いわゆる科学革命も含めて)もまた形成され発展する。

大衆的には宗教改革であり、そして、デカルト以降の「理性」と啓蒙思想であり、政治理論としての社会契約に自然法思想等、あるいは又、トーマス・クーンの言う科学革命(ニュートン力学)によるパラダイム転換である。このように資本主義の発展に経済改革と知的道徳的改革(宗教と世界観)を前提としてブルジョワ革命に政治改革が成立する。もちろん、この政治革命(ブルジョワジーの権力奪取)によってさまざまな制度的桎梏から解放される事によって資本主義の全面的発展があり、更にブルジョワ文化の発展開花(重要な要素として宗教と国家の分離を含む)があるのである。

これに対しプロレタリア革命に於いては(それが新しい階級社会を創るのではなく、階級社会そのものを廃絶する事を指すことから)封建制度の中に資本主義が成立、発展していったような意味で新しい経済制度がつけられるわけではない。

(注) マルクスが株式会社制について、レーニンが国家独占資本主義について述べているような社会主義への物質的準備は文字通り物質的準備であって新しい経済制度ではない。現在の「帝國」も同様。

それはどのような形であれ、権力の移行に政治革命を前提する。

ということである。しかしそれは「はじめは、先行する思考様式および現存する具体的な思想の止揚として、論争的かつ批判的な態度でしか自己をあらわすことはできない。」(選集二四五頁)従って「民衆の常識の進歩の頂点でもある知識人の哲学の批判として現れる」(二四六頁)だからこの批判の担い手である知識人は「新たな一つの科学をもちこむことが問題ではなく「常識」やすでにある活動を革新し批判することを通して大衆とむすびつき「知的・道徳的ブロックをうちたてねばならない。」それは「はじめは倫理の領域においてつぎには政治の領域においてたたかわれる政治的『ヘゲモニー』の闘争、対立する指導の闘争をつうじておこなわれる。」(二四八頁)そして「現代の世界において、本質的には政党が世界観に合致した倫理と政策とを仕上げる」以上この指導はエリートとしての「新君主」に党によってなされる。したがってレーニンとロシア革命を念頭に置いた「階級間の関係を変革する前に、労働者階級は人間の感じ方と考え方を革新し、人間と社会とについての根源的な把握に達し、その把握によって、ブルジョワ・ヘゲモニーにたいするカウンター・ヘゲモニーを創り出さなければならぬ。ブルジョワのヘゲモニーよりもいつそ普遍性の高い倫理的・政治的・文化的なヘゲモニーを確立して、精神の変革を行わなければ、労働者階級は国家権力に到達することは不可能であるし、たとえ到達しても、それはかえって大きな災禍をみずからの階級と他の社会諸集団にもたらすことになる。」(グラムシと現代「御茶の水書房二二六〜二七頁)とい

又、知的道徳的改革も絶対主義下で資本主義が発展し、その富とそれを前提とする精神活動によって政治革命に先立ってブルジョワジーが知的道徳的ヘゲモニーを形成したのと同じ意味でプロレタリアートがヘゲモニーを形成し得るものではない。「カウンター・ヘゲモニー」というとき「新たな科学をもちこむ事」ではなく「先行するブルジョワ思想への論争的かつ批判的な態度でしか自己をあらわせない」のである。そのような事情は権力を取った社会主義への過渡期においても持続するのであつて一般的な文化的向上はあつたとしても知的・道徳的改革(プロレタリアへのヘゲモニー)という意味では新たな科学にプロレタリア文化などというものは存在せず依然としてブルジョワ文化に対する批判と良質なその吸収が重要なのである。だからこそグラムシは「新たな科学」に「教程」をもちこんだブハーリン(スターリン)を批判したのである。

(注) あらゆる誤りの根源は、まさしく、実践の哲学を「社会学」と体系的哲学という二つの部分に分けるこの主張にある。実践の哲学に表象される近代思想の偉大な成果はまさに、哲学の具体的な歴史化および哲学と歴史との同化にあるとすれば、歴史および政治の理論から分離された哲学は形而上学以外ではありえないのである。(選集二一七二頁)

レーニンは「プロレタリア文化についてあまりにも多くのことを、あまりに軽々しく弁じたる人々にたいしては、われわれは心ならずも、不信と懐疑の念をいだきがちである。われわれにとつては、手はじめには、真のブルジョワ文化で十分であろう。」(全

集三三「量はすくなくとも、質のよいものを」同様のことをトロツキーも「文学と革命」や「裏切られ革命」(岩波版二二七頁)で述べている。だから引用した竹内氏のように言う時、氏の意図する所と違つてスターリン、ブハーリン流のプロレタリア文化と同じものになる。そして実践的にはロシアのような遅れた国では「革命はやるべきではなかった」ということになるであろう。これにたいしては次のレーニンの言葉を返す以外ない。「社会主義を建設するために、一定の文化水準(とはいへ、この一定の「文化水準」がどんなものであるかは、だれも言えない、なぜなら、それは、西ヨーロッパ諸国の一つ一つでちがつっているから)が必要ならば、なぜ、この一定の水準の前提を、まず革命的方法で獲得することからはじめ、そのあとで労働権力とソヴェト制度をもとにして、他の国民に追いつくために前進してはいけないのであろうか。」(全集三三 四九九頁「わが革命について」)

革命は図式的に経済的、文化的発展の順によつてなされるものではない。不均等発展によつてロシアは凶らずも世界革命の前衛の役を担う事となった。だが遅れたロシア革命の位置、それに伴う困難——原理と現実の落差の認識——藤田省三の言うレーニンの「原理感覚」がすぐれて表現された文章である。

そもそも「階級間の関係を変革する前に、労働者階級は人間の感じ方と考え方を変革」する等という坊主主義はマルクスともグラムシとも無縁の考えである。このような「感じ方、考え方」が変革されるのは(権力移行が平和的か暴力的かはさしあつて措

がある。」(共産主義内の左翼主義小児病)

このような情勢においても労働者人民の大多数が世界観レベルでの意識変革をとげるわけではない。労働者人民を率いる中核にヘゲモニー集団があつたとしても大多数の労働者人民は現実の自身にふりかかる惨禍を解決してくれるプログラムを提示するヘゲモニー集団を支持して変革に参加するのである。つまり「まず、民族的・大衆的集団意志の形成」なのだ。

グラムシのいう「政府権力をとる以前に指導的でなければならぬ」という意味は、指導的階級(プロレタリア)が同業組合的意識のレベルではなく「普遍的レベル」に達しない限り他の被支配者階級を指導する事はできないという党の「質」とプロレタリア大衆の一定の層が「階級的政治的意識」(レーニンの社会民主主義的意識)に到達しなければならぬ事をすづけて主張しているのである。以上のことを党の側からいえばつぎのようになる。

党の結集点は「綱領」に表現される。綱領は、資本主義の批判とそれから結論される到達目標(共産主義)の提示といういわゆる「理論(原則)的部分」と当面する政治的、経済的、社会的、文化的要求という「実践的部分」から構成される。実践的部分は当然、各国の現状に規定される。レーニンが主張していることは党とその周辺の平時での影響力はせいぜい数十万であり、革命が被支配者大衆の事業であるとするならば、革命時にはその数十倍、数百万人、一〇〇倍、数百万人の人々が「政治」に目覚め、参加するのであつて、この圧倒的な人々は決して「世界観」を同一

くとして)経済的・社会的変革と結び付いた一定の期間を必要とする。

そして、まさに上記でレーニンが述べているように、その意識変革は、世界観全般から開始されるのではなく民族的・大衆的集団意志の政治意識の変革から開始されるのである。レーニンが「共産主義内の左翼小児病」で述べている通り、革命のためには「搾取され、抑圧されている大衆がいままでどおり生活できないことを自覚して、変更を要求するのは、革命にとつて不十分であり、搾取者が今ままでどおり生活し、支配することができないこと」が、革命にとつて必要である。「下層」が古いものをのぞまず、「上層」がいままでどおりにやつていけなくなるときにはじめて、そのときにはじめて、革命は勝利することができる。いいかえれば、この真理は、全国民的な(搾取されるものにも搾取するものにもかかわる)危機がなければ、革命は不可能であるという言葉によつていいあらわされる。つまり、革命のためには、第一に、労働者の大多数(あるいは、いずれにせよ、自覚した、思慮のふかい、政治的に積極性のある労働者の大多数)が完全に変革の必要を理解し、この変革のためにすすんで死に応じ、第二に、支配階級が政府の危機に際会し、この危機がもつともおくれた大衆をも政治にひきいれ(あらゆる真の革命の標識はいままで政治に無関心であつた、勤労、被抑圧大衆の代表者で政治的にたか能力のあるものの数が十倍に、あるいは百倍にさえ急増することである)、政府を無力にし、革命家が政府をすみやかに打倒することができるようにする必要

にしているわけではない。党と、大衆を直接的に結びつけるのは当面、世の中をどう変えるのか、つまり党の綱領の「実践的部分」を通じてである。もちろん、この「実践的部分」を規定しているのは原則的部分であり、両者を切り離すわけにはゆかない。同様の情勢に直面したとしても社会民主主義的世界観を前提とした実践的解決方策と共産主義者の実践的方策は自ずと異なつたものになる。

そして、それはレーニンの言う通り、大衆がこれまで通り生活してゆけないと感じるだけでなく、支配者階級もまた今まで通り生活し、支配する事が出来ない、つまり「上層もこれまで通りやつてゆけない」グラムシの言う支配者階級のヘゲモニーの危機が生ずる事を前提としてである。

グラムシの言う「民族的、大衆的集団意志」とは、党綱領で言えば「実践的部分」をさす。

ここに、革命に於ける政治権力をめぐる闘争政治闘争の分水嶺としての決定的重要性がある。逆に言えば、政治革命後の革命、社会革命、文化革命の困難さもここにある。即ち、政治革命は支配者階級のヘゲモニーの危機の中で、そのヘゲモニーの危機を生み出している経済的、社会的、政治的混乱をどう解決するかという事をめぐつて行われる。その解決の方策の前提に各階級(あるいは、それを代表する政党)の世界観があるとしても、直接的に世界観をめぐつて争われるわけではない。

竹内氏が言うような大衆の圧倒的部分の知的道徳的変革がな

れているわけではないのである。だからといって権力を取るべきではないということにはならない。圧倒的大衆は自分の『生活』の破綻を救い出してくれるヘゲモニーを求めて革命を支持し参加する。

従って、革命が成立し、『平時』に戻った時、諸階層の持つ（プロレタリアを含めて）旧社会から引き継いだ『慣習の力』あるいは、いわばボウフラの如くわき出る資本主義は恐るべき力を示す。

（注）「またその力は、国際資本の力、ブルジョワジーの国際的連繋の力と強固さにあるばかりではなく、習慣の力、小規模生産の力にもある。なぜなら、小規模生産は、残念ながら、まだこの世にきわめて多くのこつており、この小規模生産が、資本主義とブルジョワジーを、たえず、毎日、毎時間、自然発生的に、大規模に生みだしているからである。」（『共産主義内の左翼主義小児病』）

「階級を廃絶することは、地主と資本家を追い出すこと——われわれは、これを比較的たやすくやりとげた——だけの意味するものではなく、小商品生産者を廃絶することを意味しているが、彼らを追い出すことはできないのではなく、おしつぶすこともできるものではなく、彼らとは仲よく暮らしてゆかなければならない。」（同上）

レーニンは長い期間でのこれらの改造を主張したのであり、プロレタリア文化等というものを主張しなかった。当面のロシアでの文盲を退治する事と良質なブルジョワ文化の継承を主張したのである。グラムシも「文化の諸問題がそのあらゆる複雑さにおいて提起され、首尾一貫した解決をめざすのは、国家の創造ののち

のことである。いかなる場合にも、国家の形成以前の態度は批判的、論争的であらざるをえないし、けつして教条主義的であるわけにはゆかないし、ロマンティックな態度でなければならぬが、節度のある古典性を意識的に熱望するロマン主義でなければならぬ。」（選集二三四頁）と述べている。我々は政治革命後の『建設』の困難さをネップからスターリニズムの形成の過程、又中国革命での文化大革命から現在の『社会主義的市場経済』の紆余曲折の過程、社会主義の崩壊の中で経験してきた。

『オルタナティブ』の困難さの解明はこの論文の主題ではないが、それはレーニンとグラムシのヘゲモニーの概念を基礎としなければならない。

以上のように政治、社会、文化革命の位相についての考えにおいてグラムシとレーニンは同相である。

上記したようなグラムシの『誤読』は竹内氏に限った事ではない。例えばプーランツァスもその一人である。プーランツァスについては次回のグラムシの国家論との関係で再び触れるけれども、ここでは革命とヘゲモニーというテーマに限定して論ずる。

彼は次のように述べる。「グラムシはそこにおいて、ヘゲモニーと支配との間に理論的切断を導入している。彼によれば、一つの階級は政治的支配階級となる前に指導階級となりうるし、またならねばならない。つまり、政治権力を奪取する前に、ヘゲモニーを獲得しうるのである。」（『資本主義国家の構造』二八頁、未来社）
こう述べた後、レーニンと対比して次のように言う。「これは

レーニン主義的諸テーゼとは矛盾している。（というの）レーニンは何度も封建制から資本主義への移行というような場合——例えば、フランスにおけるブルジョワ階級の事例——とは対照的に、資本主義から社会主義への移行という具体的情勢においては、労働者階級が政治権力を奪取する以前に、支配的イデオロギーの地位を獲得することが出来ない」と主張したからである。レーニンのこのような分析は、労働者階級が自らの政党によってイデオロギー的に組織化される必要性を説いた彼の諸論文の土台となっている。」（同上、二九頁）

上記のようにプーランツァスはこの論点に関しては竹内氏と異なりレーニンの見解を支持しているのではあるが、グラムシの『誤読』に関しては共通している。

確かにグラムシは「ある社会集団は統治権を獲得する以前に、既に指導的でありうるし、またむしろ指導的であらねばならぬ（これが権力獲得そのものにとって、主要な諸条件の一つである）。その後、その社会集団が権力を行使するとき、そしてなおその権力を固く保持するならば、その社会集団は支配権を握ることになる。しかし彼らはなお『指導的』でもあり続けねばならないのである。」（『グラムシ選集』二二六頁）と述べている。

だがグラムシはプーランツァスが解釈しているように『指導的』とは言っても『支配的』イデオロギー（『ドイツイデオロギー』でのマルクスの意味で）になるとは言っていない。

このグラムシの見解はイタリアリゾルブメント期の指導——穩

健派とガリバルディに率いられた行動党の指導の内容に関して述べられたものである。そこで、グラムシは行動党にはフランスのジャコバン派が持った世界観、より具体的には綱領的立場（その場合、ブルジョワジーが農民を指導し同盟する内容）がなかった事を主張しているのである。つまり、指導的でなかったが故に統治権を獲得出来ないという指導の質の事を言っている。

いずれにしても、プーランツァス、竹内氏を含むグラムシに関する読みは、『指導的』を『支配的』と『誤読』——プーランツァスの場合は明らかに誤読であり、竹内氏の読みは反レーニンのイデオロギー的なバイアスのかかった読み——するものである。

だが、このように政治・社会・文化革命に関するレーニンとグラムシの見解の連続性を認識するとき「ヘゲモニー論」で述べたグラムシのヘゲモニー論の特質——とりわけ、ヘゲモニーを意識のみではなく『ヘゲモニー装置』として把握する——との関連が検討されねばならない。

このレーニンとグラムシの連続性——同一性とグラムシの特質——差異性を解く鍵は変革すべき対象の相違——即ちグラムシが「東方は国家が全てである」に対する「西方では頑強な市民社会が形成されている」という「東方と西方」の相違にある。

西方市民社会に於いてはヘゲモニー「装置」が決定的な重要性を持つてるのである。

次号に於いてグラムシの国家論を中心に検討する。

（下）——未完